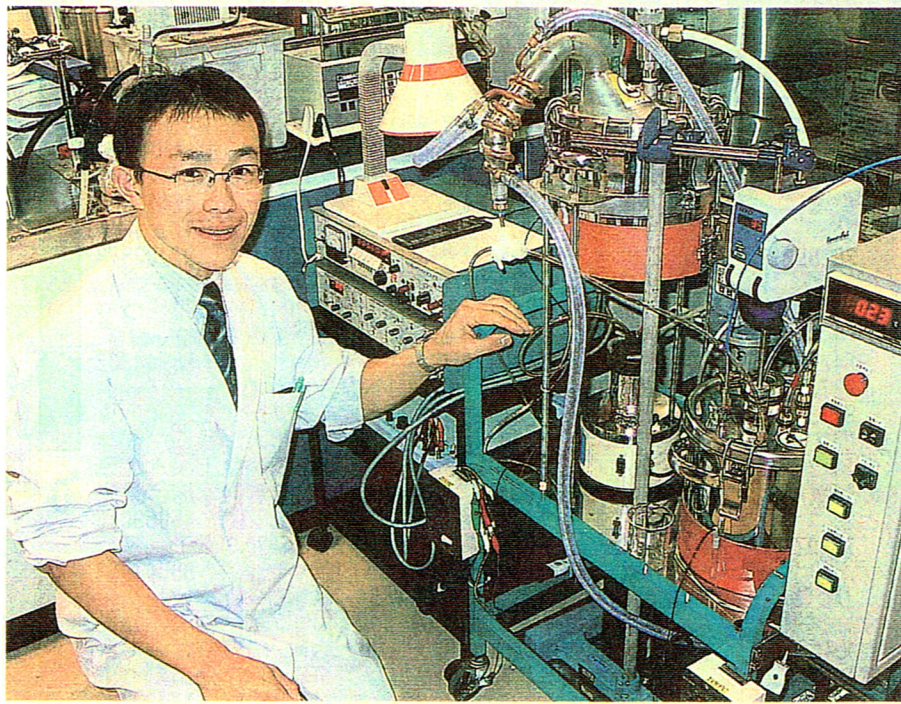


# ダイオキシンを電気分解



ダイオキシンの電気分解実用化へ装置を開発した小島文博・盛岡大短期大学部助教授

## 小島助教授

(盛岡大)短期大学部

## ら国内初の実用化

### ごみ焼却場の排ガス、灰処理

## 短時間で低費用

盛岡大短期大学の小島文博助教授(四〇)は、有機電気化学、食品機能学―は、環境関連製品の製造販売会社PBM(仙台市)と共同で、ごみ焼却場の排ガスや焼却灰などを液体の溶媒に溶かしてダイオキシン類を電気分解する方法の実用化に、国内では初めて成功した。装置は焼却炉の規模を問わず設置でき、コストも安く抑えられ、ダイオキシン処理の前進が期待される。

小島助教授が考案したダイオキシンの電気分解

は、短時間で低コストの処理が可能で、中小規模の焼却炉にも取り付けられる。焼却灰、汚染土壌の浄化や一部の農薬、ポリ塩化ビフェニール(PCB)の分解にも活用できるといふ。

実用化実験では、溶媒(ヘキサンなど)に溶かした三百―五百gの焼却灰を試作装置に入れてから約二時間で、ダイオキ

シン類が塩素化合物と二酸化炭素、水などに分解され、ほぼ無害化できた。汚染土壌についても同じ結果を得た。

装置は焼却炉の大きさに合わせてオーダーメイドが可能で、製造コストも安い。同助教授は「高温の溶融炉が数十億円かかるのであれば、その百分の一以下で済むと思う」と話している。



使用する電源が小さくても可能なのが同装置の

特色。太陽光や風力発電、一般家庭の電源でも使えることで、普及に弾みがつきそうだ。販売を担当するPBMには、行政、産業廃棄物処理業者など

## 外国人記者の

## 査証なしで

アフガニスタン・タリバン政権は米中核同時テロが発生して間もなく、すべての外国人に国外退去を要請した。しかし査証なしで「潜入取材」を試みる記者は後を絶たず、二十三日の日本人男性を含め、身柄を拘束されるだけで四件に上る。

焼死体の身元判明 盛岡・繋の火災

盛岡市繋で二十二日

【本記は一面に】